

園庭の築山に関する研究

～子どもにとって魅力的な遊び環境を創造する試み その1～

木村歩美

(静岡市立清水高部幼稚園)

1. 研究目的

遊び場の減少と子どもの遊び・生活スタイルの変化、保護者の事故・犯罪への危機感から、子どもが外で遊ばなくなり、その結果、運動能力の低下や自然とのかかわりの減少等、子どもの育ちに好ましいとは言えない状況が近年出来つつあると危惧されている。

正木健雄(2002)は、著書の中で、行動体力は何とか一定水準を保っているものの、運動能力の著しい低下が問題であると述べている。また、吉田伊津美ら(2002)は、幼児の運動能力の年次推移をまとめた上で、子どもの運動経験の不十分さが原因で最近の幼児の運動能力は低下していると言う。文部科学省の報告でも小学校1年生(6歳児)の記録の低下が指摘され、幼児の運動能力の低下が起こっていると推測できる。

自然とのかかわりについても楽観視できない。近年、子どもの遊び場は急速に減りつつあり、テレビゲームを中心とする遊びの変化、習い事へ通う子が増えるなどの生活スタイルの変化も手伝い、子どもたちは、外で遊ばなくなってきている。これは、子どもたちの遊び意識の中から、外遊び・自然の中での遊びの魅力が薄れ始めてきているということであり、外界の事象との直接体験を通して学ぶ機会が減少していることをも意味し、学校での学習活動にも影響を与えるであろう。

このような現状を踏まえ、保育の中で、子どもたちの健全な心身の発達を促すための適切な保育環境の整備の必要性は高まってきていると思われる。

そこで、今回、園庭、特に築山に着目する。築山は「子どもたちの特性を踏まえた育ちの保障」を考慮する上で、有効な“遊具”となりうる可能性が高いからである。仙田満(東京工業大学)は、子どもの滞留行動の研究から、子どもたちのお気に入りの場所として、隠所・高所・別所を挙げるが、この条件の全てを築山は満たす。築山を作り、そこで子どもたちが遊ぶことで、運動能力も平地で遊ぶより高まり、自然ともふれ合い、そして子どもたちの遊びの質が高まったり、友だち同士のかかわり合いも増えるだろう。このような仮説をもとに、ここでは、築山作りを通して保育の見直しを進めてきた著者の所属する園での実践をベースに、保育における築山の有用性を追究する。

2. 研究方法

日々の保育で集めた事例(日案簿、写真等の画像等で記録)を元に考察する。

3. 研究結果と考察

(1) 当園の立地環境並びに築山建設の歴史

詳しくは昨年度の『日本保育学会第56回大会発表論文集 p576』をご参照下さい。

(2) 日本保育界における築山の起こり

明治初期、関信三が著した『幼稚園創立法』(明治11年)には、「山谷田園池沼島嶼等を築造し」と書かれ、東基吉著の『幼稚園保育法』(明治36年)には、「遊園内に設くべき諸般の設計を列挙す時は次の如し」として、砂場や砂利場、樹木、花壇、小山、池などが挙げられている。そして、「要するに遊園内はなるべく自然地理の要素を多く備へて自然界の完全なる小模型たるに適せしむべきなり」とし、園庭の重要性を説いている。園庭は、幼児の成長に重大な役割を担うとされた自然界との出会いを演出する場として位置付けられ、築山にもその使命があったと言えよう。

(3) 子どもたちの遊びの様子から

◆コミュニケーション・ツールの提供◆

園内にいる虫の種類(バッタ、カナブン、コクワガタ、コオロギ、スズムシ、セミなど)と数が格段に増えた。また、鳥のエサとなるような小さな虫もたくさん築山に住みついたため、ツバメなどの鳥が随分と園に飛来するようになった。この事で、園内で虫採りに夢中になる子が増え、虫への興味・感心が高まってきた。そして、会話が弾み、友だちの輪が広がった。虫がコミュニケーションツールとして役立っていた。

◆科学的な視点が芽生えやすい築山◆

捕まえた虫がどんな虫なのか、どうやって飼ったらよいのか等を図鑑などで調べ・話し合う活動が盛んになってきた。ある子は「せんせい、これはトノサマバッタじゃないみたいだよ、だってここが違うもん」と、捕まえたバッタを図鑑と照らし合わせながら分析していた。科学的な思考が育つ機会を園での生活で自然と得ていると言えよう。

◆地形(坂)の活用◆

平地でできるようになった、竹馬や縄跳び、ぽっくり、サッカーのドリブルなどを、今度は坂で挑戦して

みようとする子が大変に多くなっている。

坂は子どもたちにとって、自分を試す場であり、自信をつける場であるようだ。何かに挑戦し、できるようになると、次のステップとして、坂で挑戦してみようとする子が多い。出来るようになり、「ちょっと難しそうなことに挑戦する」気持ちを幼児はもっている。平地から斜面へ。難易度を上げて、挑戦する楽しさ。出来た喜び。さらに上のレベルを試そうとする。この築山には子どもの挑戦する気持ちに応えられる内容がある。保育者が敢えて用意するのではなく、いつもそこにある、という環境として、このような“挑戦する場”が園内にある事の大事さを感じた。

◆運動能力が育成される場◆

坂を使うことで、特に運動能力が育つ可能性が高いことが推測できる。高低差を設けることは、トレーニングや、一斉保育を行わずして、遊びの中で容易に筋力が育つ。先に取り上げた虫採りの場合においても、昆虫を追いかけるだけで、築山を何度も上り下りする。どの園にも殆ど設置されている、業者等の販売する固定遊具でも筋力をつくであろうが、子どもたちの自発的な活動の中で、無理なく極めて自然に筋力が鍛えられ、その結果、運動能力が育成される、という保育環境が提供できると言えよう。

◆“滞留する場”としてのトンネル・山頂◆

築山完成後しばらくし、特に山頂部での子どもたちの滞留時間の短かさに気づき、遊びの拠点となるような机や椅子、パラソルの設置、柔らかい山土の搬入等を行った。また、シロツメグサ等の雑草も移植した。この事により、山頂で長時間遊び(ごっこあそびが主)を展開する子どもたちが増加した。

トンネル(高さ1m、幅80cmの長方形型)は大変人気で、遊びの拠点であったり鬼ごっこ等の隠れ場、通路だったりする。底にたまる砂は泥だんごに利用され、単純になりがちな隠れんぼに変化をもたらした(逃げ方・捕まえ方に多様性が生まれた)。

4. 成果と課題

今回の研究を通し、仮説はある程度検証できたと考えている。以下、成果と課題を挙げる。

- (1) 変化に富んだ地形は、自発的な活動を通しての筋力・運動能力の育成に寄与する
- (2) 擬似的自然体験ができる築山は多様な遊びを生む可能性を秘める
- (3) 自分を試し、自信をつける場としての機能
- (4) 自然スペースでの虫探しにおける3つの機能

(コミュニケーションの促進、遊びネットワークの形成、科学的思考の育成)

- (5) 気持ちが落ち着く空間、“別所”
- (6) トンネルには、滞留する場所としての機能、通過する道としての機能があり、様々な遊びを更に盛り上げる効果もある(隠所)
- (7) 子どもにとって“明日も絶対そこにある”という“自然遊具”の存在が、連続した遊びを生む
- (8) 職員間のコラボレーションの必要性和築山の活用法は大きな課題
- (9) 築山の効果を継続的に研究する必要がある

おわりに

文部科学省が2003年8月、幼稚園施設整備指針を発表した。この第4章、園庭計画の部分には、「幼児の自然体験を豊かにするため安全性や防犯性の確保に十分留意しつつ、自然の傾斜、段差等を有効に活用して、各施設部分を計画・設計することが望ましい」、「敷地内に、幼児が登ったり駆け下りたりできる築山、通り抜けができるトンネル、泥遊びができる場所等を安全面及び衛生面に留意しつつ計画することもある」という記述がある。今言われ始めている園庭についての考え方が、明治時代、関信三や中村五六、東基吉らが提唱した園庭の姿と殆ど変わりが無いことに気づいた時、先人たちの感性の鋭さに敬意を表すると共に、子どもにとって有益な保育環境とは何なのか、今、改めて問い直す時期に来ていると感じた。

【引用・参考文献】

- ・正木健雄 2002 「データが語る子どものからだと心の危機」 芽ばえ社
- ・吉田伊津美・杉原 隆・近藤充夫・森司朗 2002 「幼児の運動能力の年次推移」 体育の科学 Vol.52 No.1 p.29 - p.33
- ・文部科学省 2000 「体力・運動能力調査報告書」 文部科学省
- ・岡田正章監修 1977 「明治保育文献集」 第二巻 第七巻 杉原書店
- ・仙田 満 1999 「ランドスケープの新しい波 明日の空間論を拓く」 p.217 - 224 現代 ランドスケープ研究会編 メイブルプレス
- ・仙田 満 1998 対訳「こどものための遊び空間」市ヶ谷出版社
- ・文部科学省 2003 「幼稚園施設整備指針」 文部科学省
- ・金田利子・木村歩美「園庭の築山に関する一研究～ある公立園での試みを通して～」 2003 年度静岡大学教育学部研究報告 教育学部編